

ハリー・ポッターとhogwarts特急の コンパートメント

— J. K. ローリングのホモ・ソーシャルな空間工学を読む

小 島 基 洋

ハリー (Harry) とロン (Ron) とハーマイオニー (Hermione) — 『ハリー・ポッター』シリーズの主軸となる仲良し三人組が初めて対面するのは、キングズ・クロス駅を出発したhogwarts特急の中でのことである。しかし、それは全くもって、幸福な出会い、と言えるものではない。第一巻『賢者の石』 (*Harry Potter and the Philosopher's Stone*, 1997) の第六章を見てみよう。

‘...Anyway, we’d better go and look for Neville’s toad. You two had better change, you know, I expect we’ll be there soon.’

And she left, taking the toadless boy with her.

‘Whatever house I’m in, I hope she’s not in it,’ said Ron. (*Philosopher's Stone* 80; ch. 6)¹

ヒキガエルを失くしたネヴィル少年と共に、ハリーとロンのコンパートメントを訪れた少女ハーマイオニーは、早急に制服に着替えることを忠告しつつ、そ

1 J. K. Rowling の『ハリー・ポッター』シリーズから引用する場合は、作品の略称とページ数、章を示す。

の場をあとにする。教科書で学んだハリーに関する知識を披露する一方で、ロンが試した呪文の失敗を散々、馬鹿にした後のことである。最後のセリフからも明らかなように、ロンはハーマイオニーに対して極めて悪い印象を抱くことになる。

最終第七巻『死の秘宝』(*Harry Potter and the Deathly Hallows*, 2007)を読んだ読者は——あるいは勘のいい読者であれば——もちろんこれがロマンティック・コメディの始まりであることに気がつく。誤解を重ねた二人が、紆余曲折を経て結婚にいたる物語群のことである²。このパターンは、シェイクスピアの『真夏の夜の夢』(*A Midsummer Night's Dream*, 1590-96)などの古典から、『ノッティングヒルの恋人』(*Notting Hill*, 1999)といった現代“romcom”映画まで、延々と繰り返されてきたものである。

しかし、hogwarts特急のコンパートメントは、単にロマンティック・コメディの出会いの舞台として設定されているわけではない。ハーマイオニーへの悪感情を「彼女のいる寮に入りたくない」と表現するロンの台詞はその一例であるが、『ハリー・ポッター』シリーズの空間は、登場人物の関係性を示す上で、非常に重要な役割を果たしている。本稿の目的は、著者J. K. ローリングの工学的とも言える緻密な空間設計の図面を見出すことにある。

1. コンパートメント、蛙チョコレート、 ハーマイオニーの排除

ハリーが居場所とする空間は彼の人間関係の縮図として機能している。両親が殺され、叔父の家で養育されたハリーに与えられた部屋は、“the cupboard under the stairs” (*Philosopher's Stone* 20; ch. 2)であった。養父母とも同い年の従兄弟ダドリーとも、心身ともに隔離されてきたのだ。そんなハリーが、hog

2 Baldickの“romantic comedy”(292)の項を参照のこと。

ワーツ魔法学校に入学するために叔父の家を離れ、初めて手に入れた他者との共有空間が、汽車のコンパートメントである。

コンパートメントを共有する人物はハリーと〈親密〉な関係にある者に限定される。汽車がロンドンを出発すると、ひとりの少年が〈親密〉圏であるコンパートメントへの侵入を試みる。

The door of the compartment slid open and the youngest red-headed boy came in.

‘Anyone sitting there?’ he asked, pointing at the seat opposite Harry. (*Philosopher’s Stone* 74; ch. 6)

コンパートメントという閉鎖空間の「戸」を開け、ハリーのもとにやって来るのは少年ロンである。この後、二人はある巧妙な方法で急速に関係性を深めていく。ハリーは車内販売で、魔法世界に独特の “Bertie Bott’s Every-Flavour Beans, Droobles Best Blowing Gum, Chocolate Frogs” (*Philosopher’s Stone* 76; ch. 6) といった菓子を購入し、それをロンと分け合って食べるのだ。駄菓子を一緒に食べる場面は、我々の幼少期の記憶を呼び起こすだけでなく、大げさに言えば、食を共有することによって共同体を形成した人類の記憶をも喚起する。著者ローリングは、我々の（無）意識に訴えながら、極めて効率的に二人を〈親密〉な友達にするのである。

一方で、ハリーとロンのいるコンパートメントの〈親密〉な空間は、排他的な空間としても機能し始める。ハリーのライバルとなるドラコ・マルフォイが、子分を二人引き連れてやって来た時のことである。彼はハリーの両親を侮辱し、ロンの家族であるウィーズリー家をあからさまに馬鹿にする。

Both Harry and Ron stood up. Ron’s face was as red as his hair.

‘Say that again,’ he said.

‘Oh, you’re going to fight us, are you?’ Malfoy sneered.

‘Unless you get out now,’ said Harry, more bravely than he felt, because Crabbe and Goyle were a lot bigger than him or Ron.

‘But we don’t feel like leaving, do we, boys? We’ve eaten all our food and you still seem to have some.’

Goyle reached towards the Chocolate Frogs next to Ron . . . (*Philosopher’s Stone* 81-82; ch. 6)

ハリーの購入した駄菓子——その代表格は「蛙チョコ」だ——をめぐって乱闘を繰り広げた末に、マルフォイら一味は何ひとつ「食べ物」を奪うことができぬまま、「出て行く」ことになる。こうして二人組は彼らの〈親密〉空間に平和を取り戻すのだ。

ハーマイオニーがハリーとロンのコンパートメントを再び訪れるのは、この直後のことである。

‘You’d better hurry up and put your robes on, I’ve just been up the front to ask the driver and he says we’re nearly there. You haven’t been fighting, have you? You’ll be in trouble before we even get there!’

‘Scabbers has been fighting, not us,’ said Ron, scowling at her. ‘Would you mind leaving while we change?’ (*Philosopher’s Stone* 82; ch. 6)

マルフォイに続いて、ハーマイオニーは再びコンパートメントから排除される。しかも今回はロンに直接、退出を命じられることになる。ここで不幸な出会いを反復することは、単にロマンティック・コメディの文法を強調しているのだとも考えられるが、物語上、同じやりとりを繰り返すことは効率的とはいえない。注目すべきは、二度目の来訪時にハーマイオニーが排除された理由である。ロンはこの時、自分たちが「着替えるから」と言って彼女を立ち去らせている。ハーマイオニーが排除されたのは、彼女が単にお節介だったからでなく、〈女性〉であるからなのだ。原理的にはハーマイオニー以外の女性も退出せざるを得ない。この瞬間、コンパートメントはハリーとロンの〈親密〉な空間である

のと同時に、彼ら二人の〈男性〉の空間に変質するのである³。

ちなみに、コンパートメントに入れなかった〈女性〉が、ハーマイオニーのほかにもう一人いることにも注意しておこう。汽車が出発する前のこと、ハリーのコンパートメントに最初に足を踏み入れたのは、ロンの兄フレッドだった。ハリーの重いトランクを中に運び込む手伝いをしたのだ。彼はホームに降りて、見送りに来ていた母親にこんな自慢をする。

‘Hey, Mum, guess what? Guess who we just met on the train?’

Harry leant back quickly so they couldn’t see him looking.

‘You know that black-haired boy who was near us in the station? Know who he is?’

‘Who?’

‘*Harry Potter!*’

Harry heard the little girl’s voice.

‘Oh, Mum, can I go on the train and see him, Mum, oh please . . .’

‘You’ve already seen him, Ginny, and the poor boy isn’t something you goggle at in a zoo. . . .’ (*Philosopher’s Stone* 73; ch. 6)

ハリーが汽車に乗っていることを知ったロンの妹ジニーは、ハリーに会いたがるのだが、母親にそれを禁じられている。この時、ジニーは「汽車に乗って」ハリーを見たいと言う。しかし、このやり取りをハリーが汽車の中から密かに眺めていたことから分かるように、車内のハリーを見るためには、ホームからでも不可能ではない。このエピソードが何を意味するかは再考しなければならないが、第一巻のジニーもまた、「汽車に乗って」ハリーのコンパートメン

3 本論の着想は、ホモソーシャリティの縮図がコンパートメントの場面に見られるという 2012 年度のゼミ生・宮森勇斗君の指摘から得られたものである。彼の卒業論文は「イギリス映画におけるホモソーシャリティの考察」という題名で愛知大学文学部に提出された。

トに入ることができなかったもう一人の少女なのだ。

2. 女子トイレ、トロールとの激闘、ハーマイオニーの奪還

hogwarts魔法学校の女子トイレは——それが〈男性〉を排除する場であるという意味において（当たり前だが）——例外的な空間であると言える。著者が女性であるにも関わらず、『ハリー・ポッター』作品では、基本的に〈女性〉の世界が描かれることはない。ハーマイオニーが、ハリーとロンの目が届かない女子寮でどんな生活を送っているのかは謎のままだ。そんな〈女性〉だけの世界を例外的に垣間見ることができるのが、第十章の次の場面である。

Hermione didn't turn up for the next class and wasn't seen all afternoon. On their way down to the Great Hall for the Hallowe'en feast, Harry and Ron overheard Parvati Patil telling her friend Lavender that Hermione was crying in the girls' toilets and wanted to be left alone. (*Philosopher's Stone* 127; ch. 10)

ハーマイオニーが泣いている原因は、ある授業の後でロンに悪口を言われたことにある。得意げに呪文を成功させたハーマイオニーに腹を立てた彼が、“It's no wonder no one can stand her,” (*Philosopher's Stone* 127; ch. 10) とハリーに漏らす。それを偶然にも聞いてしまった彼女はショックを受けたのだ。女子トイレは共同生活を送る生徒たちにとって唯一の個人スペースであると同時に、男子生徒が近づくことができない場でもある。呪文の技能を自慢したことで、汽車内のコンパートメントから排除されたハーマイオニーが、今度は、同じ理由で学校内の女子トイレに逃げ込むことになる。〈女性〉空間である女子トイレは〈男性〉空間であるコンパートメントの対応物なのである。

しかしながら、〈女性〉空間であるはずの女子トイレにハーマイオニーは安住することができない。この日の午後に行われたハロウィーン・パーティーの最中に、トロールが学校を襲撃する事件が起こる。ハリーとロンは、一人で

女子トイレにこもるハーマイオニーに危険を知らせに向かう途中で、巨体のトロールが“a huge wooden club”を引きずって歩くのを目撃する。

The troll stopped next to a doorway and peered inside. It wagged its long ears, making up its tiny mind, then slouched slowly into the room.

‘The key’s in the lock,’ Harry muttered. ‘We could lock it in.’

‘Good idea,’ said Ron nervously. (*Philosopher’s Stone* 129; ch. 10)

「鍵」をかけることで、ハリーはトロールを部屋に閉じ込めることに成功するのだが、部屋の中から悲鳴を聞いた瞬間、それがハーマイオニーが隠れていた女子トイレであることに気がつく。こうして彼らは、否応なく、「鍵」を開けてトロールのいる女子トイレに突入することになる。この極めて不自然な展開には注意が必要だ。女子トイレの部屋自体になぜか「鍵穴」がついており、その鍵穴になぜか放置された「鍵」がある。彼らは女子トイレに入る前に、それを一旦、施錠し、再び開錠するという手続きを踏むことになる。この煩雑なプロセスは、女子トイレの〈女性〉空間としての閉鎖性と、それが〈男性〉原理によって開放されることを象徴的に表している——そう読む以上に合理的な解釈はない。ローリングはリアリティを放棄してまで、女子トイレの意味を明確化したのだ

第二作『秘密の部屋』(*Harry Potter and the Chamber of Secrets*, 1998)においても、別の女子トイレが主要な舞台となるのだが、やはりそこも繰り返し〈男性〉に侵入されることになる。

He reached for the brass doorknob but suddenly withdrew his hand as though he’d been burned.

‘What’s the matter?’ said Harry.

‘Can’t go in there,’ said Ron gruffly, ‘that’s a girls’ toilet.’

‘Oh, Ron, there won’t be anyone in there,’ said Hermione, standing up and coming over. ‘That’s Moaning Myrtle’s place. Come on, let’s have a look.’

And ignoring the large ‘Out of Order’ sign, she opened the door. (*Chamber of Secrets* 170; ch. 9)

ロンがドアノブに触れることすらためらった女子トイレは、マートルという生徒がかつて死亡した場所である。そのため、現在は閉鎖されているのだが、ハーマイオニーはその「戸」を開けて中に入る。マートルの幽霊は、ハーマイオニーに促されて中に入ったハリーとロンに対して、“This is a *girls’* bathroom,” “*They’re not girls.*” (*Chamber of Secrets*, 170; ch. 9) と異議を唱え、その侵入を拒絶しようとするものの、結局は彼らの自由な出入りを許容することになる。実は、マートルが棲む女子トイレに〈男性〉が侵入したのは初めてのことでない。彼女は自分が殺された時のことを、後にこう語る。

‘It happened right in here. I died in this very cubicle. I remember it so well. I’d hidden because Olive Hornby was teasing me about my glasses. The door was locked, and I was crying, and then I heard somebody come in. They said something funny. A different language, I think it must have been. Anyway, what really got me was that it was a *boy* speaking. So I unlocked the door, to tell him to go and use his own toilet, and then —’ Myrtle swelled importantly, her face shining, ‘*I died.*’ (*Chamber of Secrets* 322; ch. 16)

この時、自ら個室の「鍵」を開けてしまったマートルは、トイレに侵入してきたバシリスクに睨まれて命を落としたのだ。しかし、突然の出来事だったために、今なお事態を把握できていない彼女は、「女子」トイレに侵入した「男子」が自らを殺害したのだと理解している⁴。

4 マートルはその後、立場を逆転させ、〈男性〉空間への侵入者となる。第四巻『炎のゴブレット』(*Harry Potter and the Goblet of Fire*, 2000)において、ハリーが一人、監督生の風呂で入浴していると、そこに突然マートルが現れる。恥ずかしがる裸のハリーに対して、マートルは臆することなく、誘惑的とも言える態度で接する (*Goblet of Fire*, 502-08; ch. 25)。この場面は言うまでもなく、十四歳の男子のセ

マートルの事件は第一巻のハーマイオニーが辿ったかもしれない運命を暗示したものとも言えよう。ハリーとロンの助けがなければ、彼女もトロールに殺されていたはずだ。〈女性〉空間にこもる者は〈男性〉的な存在によって襲撃される——初期の『ハリー・ポッター』シリーズは、なぜかそのように構築されている。助かる道は別の〈男性〉に救出される他にはない。第二巻におけるマートルの悲劇は、第一巻でハーマイオニーが取った行動を遡及的に正当化することになる。

ハーマイオニーが閉じこもる女子トイレに乱入した三人の〈男性〉——トロールとハリーとロン——は、そこで極めて〈男性〉的な闘争を繰り広げる。洗面台を破壊しながら、ハーマイオニーに襲いかかるトロールに対し、ハリーは背後から飛びついて、自らの杖をトロールに突き刺す。一方、ロンは呪文によって空中に浮遊させたトロールの棍棒を彼の頭上に落とし、トロールを失神させる。奇妙なことに、この時のハーマイオニーはトロールに対して怖気づくのみだ。

‘Come on, run, *run!*’ Harry yelled at Hermione, trying to pull her towards the door, but she couldn’t move, she was still flat against the wall, her mouth open with terror. (*Philosopher’s Stone* 130; ch. 10)

〈女性〉の空間である女子トイレに逃げ込んだハーマイオニーは、そこで異様なまでに弱体化する。彼女の気の強い性格からして、トロールに無抵抗なのは不自然であるし、そもそも、悪口を言われたくらいで泣いている事自体、少々奇妙であった。女子トイレにおける三人はその個性を離れて、まるで、強い〈男性〉と弱い〈女性〉という対照的なキャラクターを演じているようなので

ㄨ クシャリティを象徴している。監督生の風呂という〈男性〉空間は、マートルという年上の〈女性〉に侵入され、消極的な少年ハリーは、積極的な少女マートルを前に、なすすべもなく困惑するのみである。

ある。

トロールとの戦いの中で、対照的な振る舞いを見せたハリー、ロン、ハーマイオニーの三人は、結果として「友達」になった——第十章はそう締めくくられる。

But from that moment on, Hermione Granger became their friend. There are some things you can't share without ending up liking each other, and knocking out a twelve-foot mountain troll is one of them. (*Philosopher's Stone* 132; ch. 10)

高圧的な態度ゆえに、〈男性〉の空間から排除されたハーマイオニーが、初めてその二人に「友達」として受け入れられるのは、〈女性〉空間の中から、弱い女性として、奪還された後のことである。彼女はあくまで弱い〈女性〉として、力づくで彼らの関係性の中に、組み込まれたのだ。この引用の二センテンス目「共通の経験をすることで互いを好きになる」の“each other”「互い」という単語が多義的であることは指摘しておくべきだろう。もちろん、それは第一義的には三人のことを指している。しかし、共有することによって「互いに好きに」させる“some things”を具体化した続きを読むと、「トロールをノックアウトしたという体験」とある。実際にノックアウトしたのはハリーとロンなのだから、論理的に「互いを好きに」なったのはハリーとロンのことだとも言える。ハーマイオニーは、危機を乗り越えて〈親密〉さを増したハリーとロンの関係性に付加されたに過ぎない、そんな解釈も可能だ。

この章で提示されているハリーとロンの関係というのは、まさにホモソーシャルなものだと言えよう⁵。そこで一番大切なのは、男性同士の強い連帯感である。ホモソーシャルな関係性はホモセクシャリティに近接しているがゆえに、強烈な同性愛嫌悪を伴う——それがセジウィック（Sedgwick）の示した卓見

5 板倉はハリーの父ジェイムズと、名付け親シリウスの間のホモソーシャルな関係性を読む。もちろん、両者の間にはハリーの母リリーがいる（48-51）。

である⁶。〈親密〉な男性同士は女性を傍らに置くことによって、彼らの関係性が精神的なつながりであることを周囲に示すことができる。ハーマイオニーが果たす役割は、ハリーとロンの間にセクシャリティが介在しないことを示すための機能的な記号に過ぎないのかもしれない。もしもそうであれば、彼女に同性間の世界が存在しないことに不思議はない。それはハリーとロンのホモソーシャルな関係を主軸とする『ハリー・ポッター』シリーズにおいて、舞台裏の出来事に過ぎないからである。

3. 秘密の部屋、バシリスクとの激闘、ジニーの奪還

『ハリー・ポッター』シリーズ第二巻『秘密の部屋』を読んだ時に何となく既視感を覚えた読者もいたかもしれない。その原因を明確にしておくことに意義はあるだろう。ひとつには、その物語の大枠が第一作『賢者の石』の一部と似通っている点にあるのだと考えられる。第二巻のクライマックスでは、ハリーがマートルの女子トイレから「秘密の部屋」に侵入し、巨大な蛇・バシリスクを倒して、囚われた少女を奪還するのだが、これは、第一巻のあるエピソードを反復したものと言える。もうひとつ理由があるとすれば、ローリングが『秘密の部屋』の下敷きとして——明言していないが——誰もが知っている「竜退治」の物語を採用したことにある。「勇者」が「竜」を倒して「姫」を獲得するという話型だ。イングランドの守護聖人ゲオルギオスの伝説から、ヤマタノオロチの伝説にいたるまで、古今東西で語り継がれた定型の説話パターンである⁷。

6 Sedgwick の議論は、二人の男性が一人の女性をめぐる争う「三角関係」の分析に向かうが、『ハリー・ポッター』の三人はもちろん「三角関係」ではない。彼らがローティーンで出会ったために、恋愛を介することなく、「三人組」を形成できたということかもしれない。

7 神話における「竜退治」の概説書としては Ogden を参照のこと。またそれらを

『秘密の部屋』の物語を「竜退治」を軸に読み解いてみよう。まず、「姫」を助ける「勇者」たる資格をもたないのは、第一に、〈女性〉であるハーマイオニーである。彼女は物語の中盤で、「竜」であるバシリスクによって石にされてしまう。「秘密の部屋」に向かうのは、三人の〈男性〉、ハリーとロン、そして教師ロックハート（Lockhart）である。その途中、トンネルの天井が落ちてきて、偶然にも、ロンとロックハートの進路が妨害される——という余りに不自然なアクシデントが起こる。最終的にハリーひとりがバシリスクのいる「秘密の部屋」にたどり着くのだが、「竜退治」の文脈で考えれば、もちろんそれは偶然ではない。ロックハートは、その美しい容姿と嘘の武勇伝を語って女性人気を獲得した偽・英雄であり、彼が脱落するのは当然である⁸。また、ロンが脱落する理由は、囚われた「姫」が、彼とは決して結婚することのできない少女だったからである。そうであれば、「竜」バシリスクを倒し、「姫」を救出するのは、「勇者」ハリーをおいて他にない。

Shaking all over, Harry pulled himself up. . . . Slowly, he gathered together his wand and the Sorting Hat, and with a huge tug, retrieved the glittering sword from the roof of the Basilisk's mouth.

、言語的な側面から分析したものに Watkins がある。民間伝承における「竜退治」物語を分類・整理した研究としては Thompson のものが有名。

- 8 ローリングが「竜退治」の物語パターンを意識的に『秘密の部屋』に適用したことは間違いないだろう。Thompson (88-90) の研究によると、「竜退治」(the dragon-slayer) の物語には偽・英雄 (impostor) が登場するという。龍を退治し終わった後で主人公は放浪の旅に出るのだが、その間に姫の従者が戦利品である竜の首を証拠に、竜を退治したのは自分だと主張する。『秘密の部屋』の中でも、ロックハートは途中で発見した「蛇の皮」を持って帰って功績を横取りしようとする (*Chamber of Secrets* 326; ch. 16)。また一般に「竜退治」には、姫が涙 (a tear) を流すことによって主人公を眠りから覚ますエピソードがあるのだが、これは『秘密の部屋』で負傷したハリーの傷を不死鳥フォークス (Fawkes) が涙を流して治す場面に対応する (*Chamber of Secrets* 345-46; ch. 17)。

Then came a faint moan from the Chamber. Ginny was stirring. As Harry hurried towards her, she sat up. She bemused eyes travelled from the huge form of the dead Basilisk, over Harry, in his blood-soaked robes, then to the diary in his hand. She drew a great, shuddering gasp and tears began to pour down her face. (*Chamber of Secrets*, 346-47; ch. 17)

一人の少女が目覚めるのは、ハリーが（直前に倒した相手は若き日のヴォルデモートであるリドル青年だったにも関わらず）バシリスクを倒した剣⁹を抜いた瞬間のことである。この時、「秘密の部屋」に横たわっていた「姫」が、ロンの妹ジニーだ。彼女が最初に見たものは倒された「竜」バシリスクの姿であり、その手前には血に汚れた「勇者」——そして未来の夫——ハリーの姿がある。第二作『秘密の部屋』は「竜退治」の物語によって構築された物語だったのである。

ローリングが「竜退治」の物語を、第一作『賢者の石』第十章において用いたのかどうか——これは、第二作のケースほど明確ではない。再度、第一作のトロールを倒す場面を振り返ってみよう。ハリーによって鼻の穴に杖を突っ込まれトロールが大暴れしている場面である。

Hermione had sunk to the floor in fright; Ron pulled out his own wand — not knowing what he was going to do he heard himself cry the first spell that came into his head: ‘*Wingardium Leviosa!*’

9 「剣」が「竜」を倒す定番の道具であることは言うまでもない。この剣はグリフィンドールの剣と呼ばれ、第七巻『死の秘宝』で大蛇ナギニを倒す際に再び使用される (*Deathly Hallows* 587; ch. 36)。ベオウルフの「ネイリング (Naegling)」、スサノオの「天羽々斬剣」、ジークフリートの「バルムンク (Balmung)」等々、名剣の名は伝統的に竜退治の英雄と共に言及されている。『秘密の部屋』が「騎士道」物語を基盤にしていることに言及した Cothran (129, 133) は、ジニー (Ginny) の名がグネヴィア (Ginevra) であることに着目し、グリフィンドールの剣がアーサー王伝説におけるエクスカリバーを思い起こさせるとも述べる。

The club flew suddenly out of the troll's hand, rose high, high up into the air, turned slowly over — and dropped, with a sickening crack, on to its owner's head. The troll swayed on the spot and then fell flat on its face, with a thud that made the whole room tremble. (*Philosopher's Stone* 130; ch. 10)

茫然自失のハーマイオニーの傍らで、ハリーとロンが共同でトロールを撃退したのだが、よく読めば最終的な打撃を与えたのはロンであることが分かる。この章が「竜退治」の物語を下敷きにしているのであれば、「勇者」はロンであり、「姫」はハーマイオニーということになる。

もしもハーマイオニーが女子トイレで「姫」の役割を演じていたのだとすれば、彼女の不自然なまでの受動性も説明が可能だ¹⁰。これは、第二巻の「姫」であるジニーが、ハリーに憧れを抱きつつも、一言も口を開けなくなることと対応しているのかもしれない。“You don't know how weird it is for her [Ginny] to be this shy, she never shuts up normally.” (*Chamber of Secrets* 47: ch. 3) — 確かに、兄ロンは妹の不自然な振る舞いを訝しがっていた。第一巻のハーマイオニーと、第二巻のジニーは、彼女たち自身である前に、「勇者」の救出を待つ「姫」だったのだ。

仮に『賢者の石』のトロール撃退が「竜退治」の変種だとすれば、第一巻・

10 ハーマイオニーについてフェミニズム的な視点から批判する論者 (Shoefer, Heilman) は、やはりトロールに対して無抵抗な彼女にアンチ・フェミニスト的な思想を読み取り、慨嘆する。一方で、フェミニズム的な視点からハーマイオニーを擁護する論 (Dresang, Bell) もある。特に Bell のものはハーマイオニー擁護論ばかりを集めた一冊の論集である。真逆な結論に導かれるのは、結局のところ、彼女の「長所」である〈知性〉や〈決断力〉〈冷静さ〉といった点を重視するか、「短所」である〈情緒の不安定さ〉〈同性の友人の友達の欠如〉〈肉体的な弱さ〉〈男への従属〉を重視するかにかかっているようだ。ハーマイオニーが戦闘的な第二波フェミニストでないことは間違いないにしても、彼女をある種のフェミニストとして擁護する余地は明らかにあるのだろう。大事なことは Rowling が相反する要素の按配に極めて意識的であった点であろう。

第十章の最後は三つ目の解釈が可能になるだろう。再度引用しよう。

But from that moment on, Hermione Granger became their friend. There are some things you can't share without ending up liking each other, and knocking out a twelve-foot mountain troll is one of them. (*Philosopher's Stone* 132; ch. 10)

ニセンテンス目の「トロール」を「竜」と読み替えてよいのならば、「竜退治」において「互いを好きに」なるのは、「勇者」と「姫」、すなわちロンとハーマイオニーの二人ということになる。ローリングはお得意の言葉遊びのテクニックを駆使し¹¹、この多義的なセンテンスの中に「竜退治」のテーゼをも隠したのだろうか。だとすれば、見事と言うほかない。

ハリーとロンは人生の伴侶を「竜退治」の物語の文法に則って獲得する——おそらくローリングはそれを意図したはずだ。しかし、実際にはシリーズの終盤にいたるまで、ハリーとハーマイオニーの結婚を予測していた読者がいたことが示すように¹²、必ずしも読者はその枠組みに気づくわけでない。特にトロールのケースは難しいだろう。しかし、最終巻『死の秘宝』の最終章で、ハリーとジニー、ロンとハーマイオニーの結婚を突然に告げられた読者が、そ

11 Rowling は解釈の多様性を利用した言葉遊びを得意とする。たとえば、第二巻のタイトルである“The Chamber of Secrets”（邦題『秘密の部屋』）はその代表例である。学校の中に隠されている「秘密の部屋」の封印が解かれ、生徒が襲撃される事件が起こるのだが、ハリーらがマートルの女子トイレのパイプを通して辿り着いたその場所は、「部屋」ではなく、「洞窟内の空洞」である。読者は“chamber”を前者の意味で読み始め、終盤に至って初めて後者の意味（*OED*, “chamber” II 8. b.）であったことに気付く。同様のトリックは第四作のタイトル *the “Order” of Phoenix*, (「命令」／「騎士団」)、第七作のタイトル *the Deathly “Hallows”* (「聖人」／「秘宝」) にも見られる。

12 Rowling 自身が2005年にロンとハーマイオニーがカップルになることを発言するのだが、実際に、ハリーとハーマイオニー（あるいはルーナ）が最終的なカップルとなると予想した読者は少なくなかった（Schoen, 66-81）。

れでも納得できるのは、無意識下で「竜退治」の物語が作用しているのも一因であるはずだ。

「竜退治」という神話の力を借りて、将来の伴侶を潜在的に確保したハリーとロンは、密かに異性愛者としてのアイデンティティを得たことになる。そうであれば、二人はホモソーシャルな関係性に安住することができるはずでもある。どれだけ二人が仲良くしても、そこにセクシャリティが存在しないことが明白になるからだ。しかし、二人の親密な関係性は永続的に維持されるわけではない。hogwarts 特急のコンパートメントで永遠に蛙チョコを開けているわけにはいかないのである。

終わりに — コンパートメント再び

hogwarts 特急のコンパートメントがホモソーシャルな〈男性〉空間としての機能を失うのは、第五巻『不死鳥の騎士団』(*Harry Potter and the Order of Phoenix*, 2003) でのことだ。五度目の新学期を迎えたこの時のハリーとロンは、一つのコンパートメントを共有することすら容易ではない。そこには周到に障害が設けられているのである。

The train was gathering still more speed, so that the houses outside the window flashed past, and they swayed where they stood.

‘Shall we go and find a compartment, then?’ Harry asked.

Ron and Hermione exchanged looks.

‘Er,’ said Ron.

‘We’re — well — Ron and I are supposed to go into the prefect carriage,’ Hermione said awkwardly. (*Order of Phoenix*, 167)

監督生に選ばれたロンとハーマイオニーは、ハリーとは別のコンパートメントに向かうことになる。一人取り残されたハリーのもとには、間髪を入れず、別の少女が現れる。

... Harry felt an odd sense of loss. He had never travelled on the Hogwarts Express without Ron.

‘Come on,’ Ginny told him, ‘if we get a move on we’ll be able to save them [Ron and Hermione] places.’ (*Order of Phoenix*, 167)

ロンの喪失感に苛まれるハリー（ハーマイオニーへの言及がないことは興味深い）に声をかけたのは、ジニーだ。かつてハリーのコンパートメントへの立ち入りを禁じられた少女である。こうして、ハリーはジニーと、ロンはハーマイオニーと共に一旦、別々のコンパートメントに入ることになる¹³。この出来事が象徴するのは、最早、ハリーとロンがホモソーシャルな世界に留まることができないということだろう。彼らは互いのパートナーと共に異性愛者としての自己を確立していく時期に差し掛かったのだ。

列車が北上し、ハリーらのコンパートメントにロンが合流してもなお、そこは以前のような〈男性〉空間に変質することはない。そのきっかけが明確に与えられているにも関わらず、である。次第にhogwartsに近づく汽車のコンパートメントの中で、最後に口にされる言葉はハーマイオニーのものである。

Harry was sitting with his forehead pressed against the train window, trying to get a first distant glimpse of Hogwarts, but it was a moonless night and the rain-streaked window was grimy.

‘We’d better change,’ said Hermione at last. She and Ron pinned their prefect badges carefully to their chests. (*Order of Phoenix*, 176)

四年前と同じ魔法学校の制服に「着替え」ることを促すハーマイオニーだが、今回は彼女に向かって（また、同じコンパートメント内にいたジニーとルーナに向かって）退出が要請されることはない。そして次のセンテンスで語られて

13 第五巻のコンパートメント内でハリーがロンと離ればなれになる場面があるという指摘は、京都大学総合人間学部四回生の原岡友里さんのものである。

いるのは、着替えの終了を意味する監督生バッジのローブへの装着だ。十五歳の彼らが同じコンパートメントの中でどのように着替えを済ませたのかは一切、語られてはいない。しかし、ローリングの苦し紛れの沈黙は、あるメッセージを雄弁に物語っている。hogwarts 特急のコンパートメントは最早〈男性〉ホモソーシャルな空間ではない——そんなメッセージである。ハリーとロンがいる場所は、セクシャリティが両性を分離する原理ではなく、両性を統合する原理となった異性愛空間なのである。

「十九年後」と題された最終巻『死の秘宝』の最終章には、hogwarts 特急に乗り込む子供たちを見送るハリー・ジニー夫妻、ロン・ハーマイオニー夫妻の姿がある。その最後の場面は以下のようなものである。

The last trace of steam evaporated in the autumn air. The train rounded a corner.
Harry's hand was still raised in farewell.

‘He'll be all right,’ murmured Ginny.

As Harry looked at her, he lowered his hand absent-mindedly and touched the lighting scar on his forehead.

‘I know he will.’

The scar had not pained Harry for nineteen years. All was well. (*Deathly Hallows* 607)

『ハリー・ポッター』シリーズの最後に登場するのは、ハリーとジニーの二人である。同じホームにいるはずの、ロンとハーマイオニーは背景に退いている。二十六年前の同じ日にコンパートメントの中で形成したハリーとロンのホモ・ソーシャルな友情は、時とともに消失し、互いのパートナーへの愛情にその優先順位を明け渡すのだ。

次の世代がコンパートメントの中で蛙チョコを開けるのは、もう間もなくのことである。

参考文献

英文

- Baldick, Chris. *The Oxford Dictionary of Literary Terms*. Oxford: Oxford UP, 2008. Print.
- Bell, Christopher E., ed. *Hermione Granger Saves the World: Essays on the Feminist Hermione of Hogwarts*. Jefferson, North Carolina, McFarland, 2012. Print.
- Cothran, Casey A. "Lessons in Transfiguration: Allegories of Male Identity in Rowling's *Harry Potter* Series." *Scholarly Studies in Harry Potter: Applying Academic Methods to a Popular Text*. Eds. Cynthia Whitney Hallett. Edwin Mellen P, 2005. 123-33. Print.
- Dresang, Eliza T. "Hermione Granger and the Heritage of Gender." *The Ivory Tower and Harry Potter: Perspectives on a Literary Phenomenon*. Columbia: U of Missouri P, 2002. 211-42. Print.
- Heilman, Elizabeth E. and Trevor Donaldson. "From Sexist to (sort of) Feminist Representations of Gender in the *Harry Potter* Series." Eds. Heilman. *Critical Perspectives on Harry Potter*. London: Routledge, 2009. 139-61. Print.
- Ogden, Daniel. *Drakon: Dragon Myth and Serpent Cult in the Greek and Roman Worlds*. Oxford: Oxford UP, 2013. Print.
- Oxford English Dictionary, The*. 2nd ed. Oxford: Oxford UP, 2009. CD-ROM.
- Rowling, J. K. *Harry Potter and the Chamber of Secrets*. 1998. London: Bloomsbury, 2000. Print.
- . *Harry Potter and the Deathly Hallows*. London: Bloomsbury, 2007. Print.
- . *Harry Potter and the Goblet of Fire*, London: Bloomsbury, 2001. Print.
- . *Harry Potter and the Order of Phoenix*, London Bloomsbury, 2003. Print.
- . *Harry Potter and the Philosopher's Stone*. 1997. London: Bloomsbury, 2000. Print.
- Sedgwick, Eve Kosofsky. *Between Men: English Literature and Male Homosocial Desire*. 1985. Columbia UP, 1992.
- Shoefer, Christine. "Harry Potter's Girl Trouble." *Salon.com* 13 Jan. 2000.
- Shoen, Ben., et al. *Mugglenet.com's What Will Happen in Harry Potter 7: Who Lives, Who Dies, Who Falls in Love And How Will the Adventure Finally End?* Berkeley: Ulysses P. 2006. Print.
- Thompson, Stith. *The Types of the Folktale: A Classification and Bibliography: Antti Aarne's Verzeichnis der Märchentypen* (FF Communications No. 3). Helsinki: Suomalainen Tiedakatemia, 1973. Print.
- Watkins, Calvert. *How to Kill a Dragon: Aspects of Indo-European Poetics*. Oxford: Oxford UP, 1995. Print.

和文

板倉巖一郎『大学で読むハリー・ポッター』（松柏社 2012）

映像資料

『ノッティング・ヒルの恋人』（DVD 松竹 1999）